

佐多稲子の恋愛観

野本, 泰子
九州大学大学院比較社会文化研究科

<https://doi.org/10.15017/15982>

出版情報 : Comparatio. 4, pp.82-96, 2000-03-30. 九州大学大学院比較社会文化研究科比較文化研究会
バージョン :
権利関係 :

佐多稲子の恋愛観

野本 泰子

はじめに

今日、男女の平等はかなりの程度まで実現されたと考えられている。しかし現代社会の諸相を仔細に見ると、性差の問題は意外に根深く複雑に残っていることに気付く。

本稿は、女性にとって性差が現代よりも苛酷であった時代に、妻として、母としてそして文学者として生き、数々の今日でいうジェンダーの問題に遭遇しながら人生を生き抜いた佐多稲子の生涯をその作品に考察しながら、現在なお確かな解決の糸口の見えない性差の問題解明への一アプローチを試みるその魁と考える。

佐多稲子の青春の希求とその挫折は多分に佐多の恋愛観に支配されていると思える。そこで第1章で佐多の恋愛観を佐多の読書歴と所見の中に探る。この恋愛観を背景に、第2章では、最初の結婚とその挫折前後の佐多の考え方や判断、行動等の裏付けをこの恋愛観に関連させながら作品の中に探る。今回はそこで終わる。

第1章 読書歴に見る佐多稲子の恋愛観

佐多は数度にわたって彼女の読書歴を語っている。それらは、「私の読書遍歴」「本との出会い」「本とつきあう法」「我が身ひとつの哀歓」「文学的自叙伝」等である。^(註1)ここでは結婚以前に形成された佐多の恋愛観を知る上で必要と思われる子供の頃より二十歳位までの読書歴を概観しておこう。

(1) 佐多稲子の読書歴の概観

佐多の読書歴について語ったものを読んでいくと、佐多が本を多く読んだ時期に三つの山がある。まず最初の時期は、小学生の頃で、佐多が十一歳の時一家が上京する頃までである。^(註2)この最初の環境に、当時早稲田で勉強していた文学志望の叔父がいたことで、佐多の高度な読書傾向が助長されている。小学校に入る前の佐多を初めて図書館へ連れていったのも、夏休みに帰省していたこの叔父だった。家には毎月本屋から『中央公論』や『新小説』が届けられたという。『新小説』について佐多は「純文学の小説を載せている雑誌であった」と語っている。『新小説』は明治から大正末期まで発刊された文芸雑誌で、大正十三年から芥川龍之介、菊池寛が編集主宰をしている。^(註3)小学生の佐多はその他に、家にあった漱石の本、『太陽』という雑誌、万朝報という新聞の小説などを読んでいた。『太陽』は、明治から大正にかけての権威ある総合雑誌であり、それに替わったのが『中央公論』であった。^(註3)こうした高度な読書傾向の一方で、佐多の小学校の頃の読書にもう一つの流れをつくったものがある。それは、佐多が「貸本屋に入りび

たって」読んだ「立川文庫」や、その時流行した『渦巻』^(註4)『生きぬ仲』^(註5)など、「家庭小説」といわれるもので、それらを小学生の佐多は定期購読の『少女の友』と共に読んでいた。佐多稲子の恋愛観を検討していくと、二つの恋愛観の流れが浮かび上がって来るのであるが、それらは彼女の読書の中の二つの傾向に関係があると考えられる。彼女の高度な読書傾向が恋愛至上主義的な恋愛観に結びついたとするならば、「家庭小説」はもう一つの恋愛観あるいは人生観として分類されるだろう。この第二の恋愛観の特質を求めて、ここで少し詳しく「家庭小説」について見ておきたい。「家庭小説」は「男女の習俗に即した家庭読物」^(註3)で、『金色夜叉』がその先駆とされる。狭義には日清戦争前後に近代小説から分岐した通俗小説の特徴を備えた文学を指す。明治期の家庭小説は「日本の封建的家族制の持続の上に、儒教的な道徳と市民的な愛情倫理とを争わせながら、そのような家族主義を動かすことのできない前提として生まれてきた」^(註6)という。「家庭小説」のパターンは、「家庭婦人の隠忍の美德によって」真の勝利がもたらされるというものであった。儒教主義に基づく「家庭小説」の傾向が、佐多の愛情観と人生観の形成に何らかの影響を与えたことが考えられるのである。そして、それは『くれなゐ』で問題とされる「女房的なもの」と呼ばれる佐多の良妻賢母思想として姿を顕わしていると考えられる。佐多稲子に見られる二重性については、小林裕子氏が既に『素足の娘』・『樹々新緑』—モラルの二重性^(註7)において指摘している。氏は、「こうした振子のような運動に、若い日の作者は捉らわれていたであろう」と述べている。本稿では、佐多稲子の恋愛観に顕れた二重性ということにしばって論を進めることになる。

次に佐多がたくさんの本を読むことが出来た環境は、十四、五になって、兵庫県の相生という町で父と二人で暮らしたことによってもたらされた。この期間に佐多は「二葉亭、独歩、樗牛、漱石、シェイクスピア、ユーゴーなどを乱読する」。「漱石の作品の世界は、深いところはわからぬまま、私に、知識的な生活へのあこがれを感じさせた」と佐多は語っている。そしてさらに続けて述べて、漱石を読んで感じたものは「自分には遠い生活だという、憧れの中に悲哀の混じるものだった」とあるのは、佐多の独特な本の読み方を表している。それは「ある本を読んだときの自分の状態や、そのときの情景の方を覚えている」という本の読み方である。当時の佐多はこの時期のことを題材にした「素足の娘」の桃代のように、「女学校にいきたいと望みながら、結局望みがかなえられなかった」という。悲哀はそうした彼女の境遇によって生じたものと思われる。この相生時代に父親の買ってきた『中央公論』や『改造』などを、創作欄は勿論、むずかしい論文なども読んだりしたのである。最後の読書の時期は十八歳の秋から二十一歳までの女店員時代で、佐多は男店員たちから次々に本を借りて読んだという。彼らは『『文化的』にいささか高くて』本は「主にその頃読まれていた翻訳もので、シェイクスピア、ストリンドベルク、イブセン、アナトール・フランスなどであったが、ときには近松門左衛門全集などということも」あったという。このような読書によって佐多の「感情の中に形づくられていったものは、漱石、龍之介という作家たちの文学的雰囲気」であって、佐多は「常に何か高いものにむかって憧憬を持ちつづけた」という。以上が、佐多の二十歳ころまでの読書歴である。佐多にとっての読書は、「のどがかわくという生理的な欲求」が先にあって、本を読むことは「水をのむようなこと」であったという。又、青春は佐多によれば「自分の生活というものについて希求しはじめたとき」

である。そして佐多にとって希求されるものは、何か文化的に高いものであったが、文学に対する強い憧憬は、佐多に、それは自分には手の届かない高いものと思わせた。また、佐多の青春の希求の一つとして恋愛があった。恋愛への希求については「私の二十歳」^(注8)に、「二十歳のむすめだからまた異性への感情があるのは自然だった」とある。そして、さらに「恋愛を理想的に説いた本も読んでいた」と述べているがその本については(2)において、さらに詳しくみることにする。

(2) 厨川白村の恋愛観

二十才前の佐多の恋愛観に決定的とも言える強い影響を与えたのは、厨川白村の恋愛論であったろう。佐多は『年譜の行間』^(注9)で次のように書いている。

そのころ、厨川白村の恋愛論なんかも読んでいましたが、そうすると、恋愛というものは大変神秘的にひらめいたものしか、ほんとの恋愛じゃなくて、日常の接触で好きになったのは、それはほんとの恋愛じゃないというようなことが書かれている恋愛論でしょう。けれどそんな素敵な恋愛があたしにあり得とも思えないし、もしあったとしても、経済生活が貧乏しければ、……中略……そんな素敵な恋愛にしたって、破れていってしまうのではなからうか。……中略……そんなふうな生意気な考え方にあたしはなっていたんです。

(76頁)

また『青春放浪』では次のように語られている。

若い魂に恋愛めいた揺れはあったけれど、それは表面に出ず、しかも私は恋愛をも生活の摩擦の中でいつかは色あせていくものと考えようになっていた。厨川白村の「恋愛十講」という本を読んだのもその頃だが、(全十七、286頁)

以上のことより厨川白村の恋愛論は佐多が最初の結婚をする前のこの時期に彼女の恋愛観の形成に深くかかわり、その仕上げをしたといってもよいだろう。

それでは、厨川白村の恋愛論とはどのようなものだろうか。後の論の展開に必要とされるので、ここでその内容について少し詳しくみることにしたい。

厨川白村の恋愛論は、最初大阪朝日新聞誌上に「近代の恋愛観」として、大正十年九月三十日から十月二十九日まで二十回にわたって掲載され、それはその後大正十一年十月に『近代の恋愛観』として改造社から刊行されている^(注10)。最初新聞に掲載された時は、「その恋愛至上主義は非常な反響を呼んだ」^(注11)とされている。又、『新潮日本文学事典』は「封建的な恋愛観に対して、近代的な人間観に立つ新しい恋愛観を主張」と紹介している。尚、当時の時代的背景として、大正期になって恋愛や性が脚光を浴びてきたことがある^(注12)。そして、白村の『近代の恋愛観』が新聞に掲載された頃に報道され世間の注目を浴びた二つの恋愛問題^(注13)は白

村とも相通じる恋愛至上主義の立場を示している。以下に、厨川白村の近代的とされる恋愛観の内容を更に詳しくみることにしよう。

白村の恋愛論は英詩人ブラウニングの詩の一節の引用に始まり、ブラウニングの詩の引用に終わっている。つまり、目次が「1 ラブ・イズ・ベスト」で始まり、本文も「1 “Love is best”」で始まっている。白村はこれを「恋のみが至上である」と訳している。又、「近代の恋愛観（二十）えびろぐ」で、白村は「人生の至上善とは何ぞや」という問いに対して、ブラウニングが「一少女の接吻にある」と答えたとして上田敏の訳をのせている。

「ラブ・イズ・ベスト」は、文中で〈『愛』は人生至上至高の道德であり〉（54頁）とも言い換えられている。そして、この恋愛至上主義を支える根拠としては、「精神と肉体と両方からの完全な全的人格的結合を個人と個人との間に見る事は、恋愛生活の他には断じてあり得べからざる事だ」（25頁）と、恋愛は「君臣の主従の関係」に優り、「人間が性的にも霊的にも、すべて全我的に自我を満足させることは、唯だ恋愛によってのみ可能である」（31頁）と述べている。さらに白村の恋愛至上主義は母性愛をも凌ぐものであり、母性愛は恋愛の転化したものであると見て、母性愛は「性欲に根ざせる性的恋愛の延長であり変形に外ならぬ」（24頁）と述べる。論中、恋愛と結婚との関係についてさらに言及がなされているが、「恋愛は結婚関係に入るに及んで、……中略……強められ、深められる」（25頁）とある。この恋愛と結びつけた母性愛と結婚観は、エレン・ケイの思想と同質である。両者は、その優生思想的な恋愛観・結婚観において似ている。両者の進化論的な立場をさらに詳しく見るならば、白村は『近代の恋愛観』で「恋愛なき結婚は人としての自己の存在を無意味ならしむるばかりか、民族の発達人類の進化の為にも大なる障碍を与ふる者である」と述べているし、エレン・ケイにはその著書『恋愛と結婚』^(註14)に同様の見解として「こうして、偉大な恋愛が二人の人間に与えるものは、人類全体に与えることのできる完全な発達であって、これは感覚と精神との間の統一、喜びと義務との間の統一、自己主張と自己犠牲との間の統一、そして、現在と将来との間の統一である。」という一節がある。そしてこの進化論的な立場を推し進めたところに見出される一つの考え方として白村はエレン・ケイの離婚説を引き合いに出すのである。すなわち、「後に恋愛が消滅したならば、直に其の結婚関係を断絶して可なりとする彼女（エレン・ケイ：筆者注）の自由離婚説の如きも、この論の当然の帰結として喝破せらる可き説だ」と述べている。白村とエレン・ケイの共通性は、その優生思想的な母性観と、恋愛至上主義の結婚観に限らず、恋愛の道德性においても認められる。恋愛の道德性について白村は、エレン・ケイの『婦人の道德』から「恋愛なしには結婚は不道德である」という言葉を引用している。

以上のことで分かるように、厨川白村の恋愛論はエレン・ケイの影響を強く受けている。それは、思想のみならず、章の見出しが似通っていることにも見受けられる。白村の近代の恋愛観第四章は「愛の進化」であり、エレン・ケイの『恋愛と結婚』の第二章は「恋愛の進化」である。そして、それらの章の内容においても、恋愛の歴史を歴史的に遡って説明する点も共通している。エレン・ケイの思想は最初に「青鞥」誌上で、平塚らいてう、伊藤野枝の訳で紹介されて以来、白村に限らず、大きな影響を与えた思想である。

厨川白村が『近代の恋愛観』で説く恋愛の歴史は、次のように要約される。すなわち、両性関

係は古来三つの階段を経て今日に及んだ。古代の肉的本能時代と中世の靈的宗教的女人崇拜時代とに次いで来たものは、靈肉合一の一元的恋愛観の時代であらねばならぬ。それは即ち近代だ。そして近代の「新しい恋愛観」は「婦人を一個の『人』として認め、個人の人格を確保すると共に、また完全な靈肉合一の恋愛観」であるとある。

このように歴史を辿って述べられる白村の新しい恋愛観について強調されているのは靈肉合一の一元的恋愛である。しかし、白村の恋愛論を読んだ印象として残るのは、その精神性の重視である。では、この精神性の重視という傾向は、佐多稲子の恋愛観ではどうなっているであろうか。これは、佐多が丸善での友人である佐藤キミについて語る下記の言葉の中に窺うことが出来る。

料理屋の生活で見聞する男女間の事からは、ほれたと言いいけ好かないと言いい、いい男といい、旦那と言いい、その範囲の色っぽさの中で精神的ではなかった。私自身は事実上は何も知らぬくせに、すべてを知ったつもりになっていたが、というよりはそこにあきたりなかったが、佐藤キミによってはじめて男女間のことも恋愛という言葉で語ることができたのである。その意味で彼女は私にとってたいせつであった。

（『青春放浪』^(註15)、286頁）

この時期、佐多が精神的なものとして捉えた恋愛は、『年譜の行間』では、「小説で読んで、観念的に、間接的に」知っている恋愛と語られている。又、「恋愛というものは大変神秘的にひらめいたもの」とも述べられていた。佐多が『詩と人生』^(註16)に発表した「愛は死よりも強し」という詩の結びは「愛はなまなかにあるものではないと思ふ」となっている。ここにおいても白村に似通う恋愛至上主義の傾向と精神性の重視が見られる。

白村の恋愛論に戻るが、そこで述べられている靈肉合一の一元性にも拘わらず、印象として残る恋愛における精神性への傾きについて、白村の恋愛論の中で更に詳しく見ることにしたい。まず最初の“Love is best”という見出しに強い印象を受けるのであるが、これに続くブラウニングの詩の引用の中で語られる「男と女の恋」には「皇帝オオガスタスの大業」や「百万の大軍」を凌ぐ「今も昔も変りない永遠性があり恒久性」があるとその時間をも越えた永遠性が強調されている。さらに、「千歳を隔てゝ猶ほ滅びざるもの」とつづいて、恋が肉体を越えて存在するものというイメージが浮かび上がってくるのである。その他精神性を重視する文中の箇所を二つ引用する（9頁）。

「両性関係は簡單なる性欲よりも、さらに進展し昇華して、既に至高の道德となり、信念となり芸術となっている。」

恋愛は（筆者注）「『人』としての生活の中枢に横たはる至高至大の力である。」

このような引用からも分かるように白村の恋愛観はより精神性を重視するものであると言えよう。とは言っても、性的側面の意義について語られる言葉が皆無ではない。例えば、「両性の肉結合には、他の何者とも比すべからざる絶大なる精神的意義の存する」（25頁）などがその

一つであるが、この場合も、結婚によって愛が「強められ深められる」という文脈の中で述べられている。そして、この「恋愛を基礎とせる結婚生活」の意義、という捉え方には、近代家族の特徴の一端があらわれていると言えよう。瀬地山角は、大正期になって「近代的恋愛観とそれに基づく家庭」^(註17)が広く普及したと言っている。また、上野千鶴子は「近代家族制度を支える恋愛結婚イデオロギーは恋愛＝性＝結婚の三位一体をとらえた」と述べている^(註18)。「結婚・恋愛・性」を一体のものと捉える思想はエレン・ケイにも濃厚に認められるものである。白村はこのエレン・ケイから「恋愛なしには結婚は不道德である。」(『婦人の道徳』45頁)という文句を引用してきている。さらに詳しく見るためにエレン・ケイの『恋愛と結婚』にあたってみると、エレン・ケイはそこで「新しい道徳は……中略……統合した恋愛を永久に維持するものでなければならない」(166頁)と述べ、「不道德の烙印」を押される行為として五項目を挙げ、その中の一つに「恋愛によらないあらゆる親子関係」を挙げている。このエレン・ケイの道徳観と同じ文脈をなす言葉を白村の『近代の恋愛観』の中にさがすならば、「愛なき夫婦関係」は、「一種の奴隷的売淫生活」であると批判する箇所であろう。白村の言い方によれば「愛を失った虚偽の結婚生活は、批判と自省とを有する近代人にとって、確にストリンデルベルヒが所謂『地獄』の生活に他ならない」(28頁)のものであり、あるいは、「外的条件を如何に具備した結婚であっても、そこに両性間の恋愛を欠いてゐると言ふ事は、最高の道徳から見て三文の価値なき者だ」(27頁)ということになる。以上の白村の恋愛観にあらわれる恋愛至上主義、それに基づく結婚観、道徳観、離婚観のすべての要素を佐多が内面化していたとするならば最初の結婚において様々な煩悶が生じていったことは不思議ではない。その煩悶はいかにして生じ、その決着がつけられていったかについて次章で分析を試みたい。

ここまでは、佐多が精神的と言ひ、また観念的とも言う彼女の恋愛観を厨川白村の恋愛論を中心にきてきたわけであるが、ここで、佐多の恋愛観のもう一つの特徴、それは、佐多稲子における恋愛に対する現実的捉え方、略して現実的恋愛観とでも称すべきものであるが、それについても述べておく必要があるだろう。それはまた「世間的常識」と言いかえてもよいものである。その「世間的常識」はどのように形成されたのであろうか。それは、佐多が子供の頃から人中で働いているうちに身につけたものと思われる。『あとに生きる者へ』^(註19)からの二つの引用にそれを窺うことができる。

「十九歳になったわたしは、小説をたくさん読んでいるということで人生を知ったような気だったものだ。それに上野の料理屋で働いていたことで、なにか人生の裏も見えたような気になった。ところが実際には全然知ってはいなかったのである。恋愛一つしたわけではないし、ただ観念的に知っているだけであった。」(204頁)

かつて私などの若いときでさえ、恋愛は女の一生を決定するものに考えられていて、私たちは恋愛に対して臆病にされていた。つまり女の一生を決定する、というのは勝手な恋愛などをすれば、女の決められた人生コースがくずれるものという考え方だった。だから恋愛は大変なことであって、それに一生を賭けなければならなかった。もし失敗すれば、自分の一

生はもう駄目になる。そんな考えが自分にも、そしてそれ以上に強く周囲にあった。

(115頁)

又、佐多が女中として働いていた清凌亭についての次の文は佐多がどのようにそこで世間の常識を身につけていったかを知る上で参考になるだろう。

私が若いときに働いた料亭の清凌亭主人はその点で親切な人であった。今でもおもい出すが、男主人が、はたきのかけ方を手をとっておしえてくれた。「身を堅くしておいでよ、娘だからね」と言ってくれたのもこの人である。料理屋の主人が私にそういつてくれた。娘は身を堅くすべきものということは私の若い時分の一般的なしつけだけれど、働いている場所で親身に言われたことは他人の言葉であるだけにそれは親切として心に残った。

(『驢馬』の同人たち、全十八、100頁)

このようにして子供の頃から人中で働くことによって佐多は世間の常識を身につけていった。そして丸善時代の佐多はこの世間的な常識に拠って生活していた。社内では「恋愛は御法度」であったから、佐多の「若い魂に恋愛めいた揺れはあつたけれど、それは表面に出」ることはなかった。むしろ恋愛については、世間的な見方に対する彼女の「警戒心」の故に、「うしろ指さされたくない」と、世間に対して自分で自分を縛ることとなり、佐多の「模範女店員」という評価は完全なものになっていったと思われる。精神的な恋愛観と現実的な恋愛観という二つの恋愛観の影響のもとに最初の結婚が始まるのである。それについては次章で検討しよう。

第2章 恋愛観の作品への反映

第一章において佐多稲子の恋愛観の形成を調べた結果、彼女の恋愛観には二極分離とも言うべき相対立する二つの恋愛観の存在が認められた。第2章においてはこの二つの恋愛観の対立と消長を見ることによって恋愛観の作品への反映を見ていくことにしよう。それを本稿では三つの項目によって行う。その最初の項目が(1)「恋愛へのあきらめと結婚への期待」であり、次いで、(2)「結婚への痛恨の念と恋愛観」、(3)「子供への心遣いに見られる恋愛観」である。

(1) 恋愛へのあきらめと結婚への期待

この節では二つのことについて述べたい。一つは、佐多の理想的な恋愛観は佐多が恋愛を半ばあきらめることに関係があるということであり、二つとしては、佐多があきらめながらも結婚へ期待をつなぐことにも、佐多が依拠した白村の恋愛観の関与を見ることである。まず、佐多の恋愛観自身が恋愛へのあきらめを促す要因になったと考えられることについて検討しよう。『青春放浪』にはイネがその縁談にのっかったのは「半ばあきらめたようにして」であったとある。その「半ば」の「あきらめの部分は好きでもない相手ということだった」と説明されている。恋愛への憧れについては、「内心では、美しい、激しい恋愛に憧れていた」とあり、また、それは佐

多が十八歳の時に『詩と人生』に投稿した「灯」という詩の中にも窺える。

おお誰か

私の胸の塔に

灯をつけて下さい

(全一、 18頁)

この内に秘めた恋愛への憧憬の激しさとは裏腹に、日常は「恋愛御法度」の模範店員の毎日が続いていた。そして一日働かなければそれだけ食べていけない程の経済的窮迫と単調な生活の繰り返しに疲れた若い日の佐多は、次第に厭世観に陥っていった。それでも結婚はしたいと思っていた佐多に「開かれた窓」と思われたのは上司からの縁談であった。佐多が恋愛ではなくて見合という結婚の形式にあまりにも安易に乗ってしまった原因として、恋愛に対する「あきらめ」と「世間的常識」の両方が関係しているだろう。又、その「あきらめ」は佐多の内なる恋愛至上主義的な恋愛観によってもたらされただろうし、また、世間的常識に身を添わせる佐多の現実的恋愛観が現実に対する見極めをさせただろう。佐多には、一方に理想的な恋愛が考えられていて、他方に、自分の生活ではその恋愛はあり得ないもの、あっても現実の厳しさの前にはいつしか色あせていくものとの判断があった。そして結婚話の進み方の性急さは一旦決まった話を元に戻すことを不可能にした。この二ヶ月ばかりの間に、佐多の「激しい迷い」がみられると思う。「何かしら心が弾まない。弾まないまま話が決まってしまういいよいよ身動きがとれなくなっていった」。佐多が「結婚の当日まで悩ましく思いつづけ」た様子は「ああ、誰か来て、私をかっさらってくれ！」というところまで佐多を追い詰めたと思われる。そして、佐多は「憂鬱に引きとめる自分の理性を、やけくそに踏みにじって、自分の身体を投げ捨てるように新しい環境に飛び込んでしまった。この場合佐多が最初の結婚を決意する際に佐多の恋愛観の何らかの関与があったとしても、それは「間接的」であると言えるだろう。しかし、内面に保持される恋愛の高い志向性が現実との間に大きな差をつくったという点では決断を促した大きな遠因と言えるだろう。佐多におけるこの種の傾向は佐多の「文学への希求」への対処の仕方にも指摘できる。佐多は丸善時代に生田春月から『文章倶楽部』^(註16)の五人の女流新進詩人の一人に推薦しようと手紙をもらった時に「自身の能力に対する認識」からそれを断っている。

では次に、結婚への「半ばのあきらめ」を差し引いて余りがあるとすればそれは「残った期待」ということになるが、当初佐多が抱いた結婚への期待について検討しよう。『隠された頁』では「当日になって、旅に出る汽車の中での私は、もうこれからの生活に希望を持つと努力し始めていた」と書かれている。又、『あとに生きる者へ』では「愛は、夫婦生活の中で形づくられていくものと、おもおうとしていた」とある。佐多がこのように結婚への期待をかける根拠としては二つが考えられる。その一つは「世間的常識」であり、それは佐多が人中で働く中で身につけてきたものである。作品中にそれを拾うと、

あのころの女の青春というものは、そんなものではなかつただろうか。無事にいって青春も知らぬうちにとついで納まるというのが、まだそのころまでの女の一般であつたかもしれ

ない。(『青春放浪』、287頁)

当たり前の人なら、イネは自分も当たり前の人妻に成り得ると思った。それまでの普通の娘が、一度の見合で当たり前の人妻生活をつづけているという事実が、イネにも安易な思いをさせたのであろうか。(『或女の戸籍』、165頁)

期待を持つに至る二つめの根拠としては、佐多が内面化していた白村の恋愛観が考えられる。白村の恋愛観にある「恋愛は結婚生活に入るに及んで …… 中略 …… 強められ、深められる」という文脈が佐多に結婚への期待を呼び起こしたのかも知れない。「世間的常識」に沿って結婚に飛び込んだ佐多が結婚の当初に「世間的常識」に基づいて結婚への期待をかけたとすれば、白村の恋愛観の中の言葉はその期待を強めるように作用しただろう。

(2) 痛恨の念と恋愛観

結婚してすぐにその失敗であったことに気付いた佐多が深い後悔の念に襲われたことについて、白村の恋愛観は大いに関係があると考えられる。結婚の失敗に気付くと同時に、佐多に白村の恋愛観が強烈に呼び醒まされたであろう。この部分が作品ではどのように描かれているか見ることにしよう。新婚旅行に出た旅館でイネは相手から「今までの貧乏暮らしのくせをだしては困る。…中略… 貧乏人は普段は何もないくせに、有るとおもうと、ぱっぱと使ってしまうからね。」(『或女の戸籍』 165頁)と言われる。ここに限らずいくつかの自伝小説で語られる文は、何れもほぼ同じである(註20)。イネは、夫の「予想しなかった言葉」に、顔を蒼冷めさせた。その気持ちを作品は「私はむしろ泣くような気持ちで、黙って海を見ていた。ソレ見ろ、ソレ見ろ、ソレミロ、、、私の胸の中に隠れて嗚咽がうず巻いていった。」(『隠された頁』 265頁)と描写している。この佐多の気持ちの変化とその状況を比喻するものとして「窓」「穴」「土蔵」「鉄の鍵」が巧みに用いられている。

こうした開かれた窓から身をおどらせた私は、そこにはっきりと自分の飛び込んだ穴がどんなものかということを見定めたのであった。おお、そこは一すじの陽の光さえ射さぬ土蔵の中であった。私は私のうしろにピーンと下りた鉄の錠の音をきいた。私はその中で、自分のおろかしさをあざ笑うよりほかはなかった。(『隠された頁』、268頁)

そして又、結婚への期待を表すイメージが「開かれた窓」であった。これらのイメージで思い当たるのであるが、白村の恋愛論の中にも似通ったイメージが用いられている。

全然無自覚な無批判なる者に至っては、それこそ未来永劫奴隷の苦みと畜生道の嘆きとから解脱する事の出来ない者である。愛の天国の扉は、永久に此人たちの為に固く鎖されている。(44頁)

このイメージの類似は、佐多が白村の恋愛論をイメージにおいても無意識裡に内面化したとも取れる。『あとに生きる者へ』にも「閉ざされた扉」という表現が出てくる（62頁）。

本稿で問題とするのは佐多の恋愛観とその作品への反映の様子であるが、繰り返すと、佐多の後悔の念において両者の間には強い関連があると考えられる。白村の恋愛観中の言葉、「恋愛なしには結婚は不道德である」および、「愛なき夫婦関係は一種の奴隸的淫売生活である」が、佐多の激しい後悔と自責の念をさらに強めたであろう。佐多が内面化した白村的恋愛観が、一度その結婚が間違いであることを気付いた佐多を深い絶望感に陥れるのである。「花嫁の門出の日」の有様をさらに二つの作品から引用してみよう。

若い男の口から、この言葉を聞くことは、私自身への屈辱の思いをかき立てると同時に私の感情を冷えさせてしまうほどであった。晩春の海岸の陽に見入りながら、私はやっぱり自分の取った道が非常な誤りであったことに気付くのであった。

（『乳房の悲しみ』、294頁）

私はこの結婚で深刻な不幸を経験しなければならなかった。それをまねいたのは私自身であるという絶望はいよいよ深かった。（『私の二十歳』『ふと聞えた言葉』、189頁）

佐多が最初の結婚で受けたような悔恨の念が、白村的恋愛観を持った佐多を絶望感に陥れるのは容易に想像できる。佐多はその絶望感の中で何とか生きよう生きようとしている。つまり「自己を失わないでいた」（『隠された頁』 280頁）という表現がされている。しかしある時佐多は自分を人生の敗残者と感じ、そのみすぼらしさに生きる中心を失ったかに思える。それは身重な身体でもう一度働いて生きていこうと大晦日に家出をして正月を宿屋に身を隠している時のことである。

その宿屋の廊下で私は若い夫婦の姿を見かけた。私は自分の胸が押しつぶされる程の気持で二人の姿を眺めた。私は初めて嫉妬というものを感じた。そして私は愕然とした。これからの私の、灰色に塗りつぶされた生活、私はその生活の中で押しひしがれてしまうのではないだろうか。（『隠された頁』、282頁）

佐多がこの時感じた嫉妬は、恋愛のない荒漠とした自分の人生への展望によって惹起されたのであるが、この無気力感は人生に対する敗残者と佐多に感じさせるほどに強いものであった。ここで作用する論理は裏返せば「ラブ・イズ・ベスト」という思想であるが、白村の言葉を今一度引用するならば、「人間が性的にも霊的にも、すべて全我的に自我を満足させることは、唯だ恋愛によってのみ可能である」であり、又結婚について述べた「外的条件を如何に具備した結婚であっても、そこに両性間の恋愛を欠いていると言う事は、最高の道徳から見て三文の価値なき者だ」である。恐らく引用に示したような白村の恋愛観を内面化していた佐多であったから、仲のよい若い夫婦の姿が佐多を絶望感に陥れたのであろう。

ところで、最初の結婚が悲劇とされることについて、ここで一言付け加えておく必要があるだろう。佐多の結婚に対する悔恨を見る限り、佐多の悔恨は自分を責めることに始まり、その責任を取ることに終わっている。しかし、佐多の最初の結婚での不幸は、「夫の暴力」にあった。佐多が自伝の中で最も意識的に「夫の暴力」を指摘しているのは次の箇所であろうか。「しかしこの見合い結婚の失敗はそこ（貧乏人は金を持つと浪費をするから気をつけろ、と相手の口から注意されたこと：筆者注）にあったのではなかった。相手の病的な嫉妬によってその生活は不健康をきわめた」（『青春放浪』 286頁）ことに原因した。当時は「夫の暴力」が表立って問題視されるに至っていなかったのであるが、佐多の「夫の暴力」の捉え方を見る限りでは、佐多においてもその認識は稀薄であったと言えよう。「夫の暴力」については稿を改めて論じることしたい。又、最初の結婚で佐多は三度の自殺を企てているのであるが、自殺についても今回は触れないことにする。

（3） 子供への心遣いに見られる恋愛観

『乳房の悲しみ』という自伝小説には12歳になった長女に語りかけるという形式でその出生に対する或心遣いが示されている。それは長女が愛情のない結婚によって生まれたことに対する心遣いである。その自伝小説では、まず、なぜそれが書かれなければならないかという理由が述べられる。

おまえはやがて成長し、やがて私の書いたものを読むだろう。……中略……私は自分の誕生が、父と母の若き日の愛情の結果であることを誇りもし、喜んでいる。—私はそう書いている。……中略……私が自分自身の誕生についての率直な喜びを書き止めながら、そのことだけで、今度は私によってもたらされたお前の誕生については、何ら書かずにいいだろうか。—この疑問、この逡巡は、私のお前に対する複雑な心遣いである。

（『乳房の悲しみ』、292頁）

佐多稲子の、子に対するこの疑問、この逡巡は一体何処から来るのだろうか。その源を辿れば彼女の恋愛観に行きつくだろう。エレン・ケイと同様の立場をとる白村の恋愛至上主義の結婚観に拠れば、恋愛は進化論的な意味を持っていた。その思想は端的に言えば、恋愛によって優秀な子が生まれるということであろう。さらに、白村の恋愛至上主義の恋愛観は、母性愛は恋愛の転化したものであると説くのであるから、その論の帰結するところでは、愛情なき結婚によって生まれた子供はその親からの愛情を脅かされることにもなる。このとき生じるだろう子供の危惧に対して、佐多はそれを「拒まねばならない」として「真実」を知らせておく必要を痛感するのである。この佐多が恐れていたことが後に起こっている。それは長女が結婚後、病気になって療養のため佐多のところに身を寄せていたときに起こる。

「どうせ私は、おかあちゃんの愛情のない結婚で生まれた子ですものね。おかあちゃんが私を愛していないのはわかってるわよ。……中略……私なんか生まれてこなければよかつ

た、とおかあちゃんはおもっているのよ。」

ちかえ（長女：筆者注）がそういい終わったとたん友江（佐多：筆者注）は、ちかえが生まれたときの自分の本能的な喜びと切ない激しい感情を一瞬よみがえらせた。それは今のちかえの言葉で燃え上がる怒りに変っていった。^(注21)（『溪流』、89頁）

『乳房の悲しみ』の中で、佐多が「やがて私の書いたものを読むだろう」といっているが、それはどの作品を指しているのだろうか。『乳房の悲しみ』が書かれた1937年3月以前の著作の中に該当するものを探してみた。全集で1930年7月に書かれたとされている『我がはしがき』の中に次の一節を見つけることが出来る。

私は18歳の青年であった父と、この15歳の乙女との愛情の子である私自身の血に美を感じるのである。（全十六、135頁）

この自分が愛情の子であるところに美を感じ、誇りを持つという考えは、その源を手繰れば、その先で白村とエレン・ケイの恋愛観に繋がっていると言えるだろう。

本節ではさらに次のことを指摘しておきたい。最初の結婚で離婚を決意する時に示される佐多の離婚観についてである。白村とエレン・ケイは「恋愛なき結婚においては離婚もやむなし」との見解を示しているが、佐多稲子ではどうなっているだろうか。子供が生まれてからイネは、夫が子供のために変わることには希望をつないでもう一度やり直そうと考える。しかしその希望も裏切られた。それ以上にイネの心を決めさせたのは、母乳で育てているイネにとって、夜昼なく日常的に夫の暴力に曝されたその生活では子供を育てていけないということと、子供の将来への影響であった。その結婚に止まろうとする時も終わらせようとする時も、イネの心を決めさせた源は子供への心遣いであった。そして「子供は愛していない男の子どもでもあろう。だが同時により近く私の子供である。」と思うのである。佐多の決断は子供を基準になされたのであるが、結果として離婚を決意することで、白村やエレン・ケイの離婚説と似た動きをしている。白村の恋愛観にはこの部分に関するエレン・ケイの引用はないので、佐多がエレン・ケイを読んでいたかどうかは証明できなければ、ここに直接的影響を認めることは難しい。唯、恋愛なき結婚が子供に悪影響を及ぼすのではないかという考え方においてはエレン・ケイと佐多に共通するところがあると指摘は出来る。エレン・ケイは『恋愛と結婚』の中で「両親が子供といっしょにいるのが何よりも大切であるという考え方も、片手落ちの面があることをここで指摘する必要がある。……中略……夫婦の間で相争う影響は、どちらか一人の手で静かに育てるより子どもの幸福をより増進するだろうか？」と述べている。佐多の場合、子供のために離婚を決意するのは、体験の結果によっている。そして佐多はこの体験から「これからの生きかたということには彼女なりの考えを新しく生じさせて、「もう世間的な考えに縛られるのはよそう」と思うのだった。体験の中から自ずから新しい考えを生じさせたというのであれば、エレン・ケイとの共通点があることは、佐多独自で獲得した新しさとして指摘できるのではないか。

最初の結婚を終わらせた佐多の前途には、次に本当の恋愛と子供への愛情、その二者択一の試

練が待ち受けている。それについては稿を改めて論じることにする。

おわりに

本稿は、佐多稲子の恋愛観により、最初の結婚時の佐多稲子の希求とその挫折の姿をその作品に見た。第一章では、佐多稲子の恋愛観の源をその読書歴と所見の中に求めた。その結果彼女の恋愛観に二つの流れを捉えた。一つは、厨川白村の恋愛観に依拠した恋愛至上主義的恋愛観であり、これは精神的志向性を示している夏目漱石・芥川龍之介の世界に通じていた。他方の恋愛観は、少女のころより人中で働いてきた佐多が生活者として身につけていった「世間的常識」と同質の現実的恋愛観であり、彼女の読書では「家庭小説」に代表される通俗小説の世界に属していたが、やはり、観念的域を出なかった。第二章では、佐多稲子の二つの恋愛観が彼女の最初の結婚を支配する様をその作品に見た。

ジェンダーは文化的・社会的につくられた性差であるから、恋愛観を「形成されるもの」と捉えることの中に既に恋愛がジェンダー的側面を持つことが暗示されると考えるが、本稿では、佐多稲子の恋愛観を考察することによって、佐多稲子においては、恋愛が結婚、母性愛等のジェンダーの項目と深い関わりを持ちそれらを大きく支配する様子を見た。恋愛は佐多稲子を論じる場合の重要な鍵でありテーマであると考え、今後も、恋愛を鍵として佐多稲子を論じていきたい。そして、本稿で検討したように佐多稲子においては、結婚や母性などのジェンダーの項目と恋愛が密接な関係を持っているならば、恋愛を鍵として佐多稲子を論じることは自ずと一つのジェンダー論を形成すると考えられる。勿論佐多稲子を論じるに当たっては彼女が生涯で遭遇した恋愛以外の項目も視野に入れて論じていく必要があるだろう。というのは、佐多稲子が遭遇したジェンダーの問題は数多いからである。今後さらに恋愛を含め、佐多稲子を論じる場合に重要な鍵となる他のいくつかの項目についても、佐多稲子の生涯をその作品に分析し、考察を加えていくことにしたい。そして、それらの考察を通して、現在尚解決が困難とされるジェンダーの問題解明への何らかの示唆が得られることを期待している。

注

- ここに挙げた読書歴について書いている短文の出所は次の通りである。「私の読書遍歴」『佐多稲子全集』第十七巻、講談社、1977年11月～1979年6月。以後『佐多稲子全集』については全十七のように示す。「本との出会い」全十八。「本とつきあう法」全十八。「我が身ひとつの哀歎」全十六。「文学的自叙伝」全十六
- 佐多稲子の略歴 出生～最初の結婚の離婚時 (1904～1925)
1904(明治37) 6月1日長崎市に生まれる。本名イネ。父田島正文(18歳)と高柳ユキ(15歳)の恋愛によって生まれる。
1911(明治44) 7歳 小学校に入学。母に手紙を出すと、「ヨクベンキャウヲシテ、ヨイオクサンニナルヤウニ」という返事が来た。8月、母ユキ死亡。

- 1913(大正2) 9歳 この頃から貸本屋で『渦巻』『不如帰』『金色夜叉』『生さぬ仲』などの家庭小説から、真田幸村、猿飛佐助、三好清海入道などの立川文庫を読み、父が購読していた『中央公論』、『太陽』、『新小説』などの雑誌や、『万朝報』という新聞の小説を読む。
- 1915(大4) 11歳 この頃、毎日のように図書館に通って西洋のお伽話を読む。
10月、父は三菱造船所を退社、一家を挙げて上京。小学校に一月通学した後
12月よりキャラメル工場につとめるが、まもなくやめる。
- 1916(大5) 12歳 父に定職がなく、一家は依然として貧窮を続ける。稲子は中華そば屋に数日働き、のちに上野池の端の料亭清凌亭に小間使いとして奉公し、一年間働く。
- 1917(大6) 13歳 父は相生に単身赴任する。稲子は祖母と共にメリヤス工場の内職をする。
- 1918(大7) 14歳 祖母の苦労を見兼ねて、芸者になるという手紙を父に出したのを機に、相生の父のもとに呼ばれる。この頃二葉亭、独歩、樗牛、漱石、シェイクスピア、ユーゴーなどを乱読する。また、少女小説や和歌をつくった。
- 1919(大8) 15歳 父再婚。
- 1920(大9) 16歳 稲子上京。清凌亭で座敷女中として働く。清凌亭の客であった芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、宇野浩二、佐々木模索、小島政二郎などを知る。
- 1921(大10) 17歳 女中奉公がいやになり、父のもとに行く。秋、上京。日本橋丸善書店洋品部の女店員となる。模範店員であった。
- 1922(大11) 18歳 同僚から、ストリンドベリ、イブセン、アナトール・フランス、トルストイ、近松門左衛門、倉田百三、島田清次郎などを借りて読む。生田春月主宰の『詩と人生』の準同人となり、詩を書く。生田春月より『文章倶楽部』に新人として紹介するとの手紙をもらったが、辞退した。
- 1923(大12) 19歳 単調な勤務と貧困のため、厭世的になり自殺することを空想する。
9月、関東大震災。厭世観は吹っ飛ぶ。
- 1924(大13) 20歳 3月上役より縁談を持ち込まれ見合いする。4月、大学生で資産家の小堀と結婚。年譜に「夫小堀の、肉親との財産争いによる疲れや、病的な嫉妬心のために、結婚生活は陰惨を極める。」とある。
- 1925(大14) 21歳 三度目の自殺を企てる。夫と共に睡眠薬を飲むが、どちらも一命をとりとめる。相生の父のもとに連れ戻され、6月に長女を出産。8月事実上の離婚。

(以上、『佐多稲子全集第十八巻』にある年譜、および、『昭和文学全集19』、〈角川書店、1964年4月〉からの要約による。)

- 3 『新潮日本文学辞典』
- 4 渡辺霞亭、『新潮日本文学辞典』によると、渡辺霞亭は「家庭小説と呼ばれる通俗的な現代小説を得意とし、なかでも『渦巻』(大二～三)は最も好評を博した」とある。

- 5 柳川春葉、『新潮日本文学辞典』によると、柳川春葉は「家庭小説作家として成功をおさめた。とくに『生さぬ仲』（明四五一大二）は熱狂的な人気をよび、芝居に上演されるなど通俗的評判を博した。彼の家庭小説は封建的家族制の悲劇をとらえて目新しく情趣ある平明な叙述とともに当代の読書界に足跡をとどめており、また大正期の大衆小説への橋わたしの意義も認められる。」とある。
- 6 瀬沼茂樹、「家庭小説の展開」、『明治文学全集 9 3 明治家庭小説集』430頁、筑摩書房。1969年。
- 7 小林裕子、『佐多稲子—体験と時間』68頁、翰林書房、1997年5月。
- 8 佐多稲子、『ふと聞えた言葉』、講談社、1974年10月。
- 9 佐多稲子、中央公論社、1983年。
- 10 以後、厨川白村の『近代の恋愛観』については、その出所の頁のみ示す。
- 11 「朝日新聞の記事にみる恋愛と結婚〔明治〕〔大正〕」、朝日新聞社、1997年6月。
- 12 「女と男の時空」編纂委員会、『年表・女と男の日本史』277頁、藤原書店、1998年10月。
- 13 『年表・女と男の日本史』に、「7月、歌人原阿佐諸との恋愛問題で、東北帝大教授石原純、辞表提出」、「10月、柳原白連、『大阪朝日新聞』に夫伊藤伝右衛門への絶縁状公開」とある。
- 14 エレン・ケイ、小野寺信・小野寺百合子訳、新曜社、1997年6月。
- 15 『佐多稲子全集』所収の作品についてはここにまとめて示す。『青春放浪』全十七。『乳房の悲しみ』全二。『隠された頁』全十六。『或る女の戸籍』全四。短文「『驢馬』の同人たち」全十八。
- 16 佐多は生田春月の主宰する『文章倶楽部』、のちに『詩と人生』と改題された同人誌を購読し、『詩と人生』に投稿して掲載された。
『文章倶楽部』は文芸雑誌で、大正5年5月から昭和4年4月まで新潮社から発行された。年少の文芸愛好家を対象として創刊された投稿文芸誌である。
- 17 瀬地山角、『東アジアの家父長制』153頁、勁草書房、1996年11月。
- 18 上野千鶴子、『女という快樂』251頁、勁草書房、1986年11月。
- 19 佐多稲子、青春出版社、1969年2月。
- 20 『隠された頁』では「貧乏人根性を出さないようにして呉れ」「貧乏人というのは、金さえ持つと、すぐパッパッと費ってしまうものなんだ」（265頁）となっている。
- 21 長女の湊葉子氏はこの件を佐多稲子追悼集『群れ翔ぶ』（婦人民主クラブ、1999年10月）で次のように語っている。
「母を敬愛こそすれ、恨んだりしたことは一度もないので、その事聞かれると『えー』と戸惑ってしまうんですね。振り返ってみると、あのときは病気の上に子どもを夫の家族の所へおいて療養してたりしたんで悲しく、つい言わずもがなのことを口走ったのだと思います。」（51頁）